



経営史研究における写真の利用をめぐる小考 : 明治期綿紡績業の写真を中心に

平野, 恭平

(Citation)

国民経済雑誌, 228(1):57-72

(Issue Date)

2024-03-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487665>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487665>



国民経済雑誌

THE
KOKUMIN-KEIZAI ZASSHI
(JOURNAL OF ECONOMICS & BUSINESS ADMINISTRATION)

経営史研究における
写真の利用をめぐる小考
——明治期綿紡績業の写真を中心に——

平 野 恭 平

国民経済雑誌 第228巻 第1号 抜刷

2024年3月

神戸大学経済経営学会

経営史研究における 写真の利用をめぐる小考

——明治期綿紡績業の写真を中心に——

平野 恭平^a

本稿では、画像資料の中でも近現代史固有の資料とされる写真を取り上げ、その特性を整理した上で、「挿絵」としての写真、「画証」としての写真、写真の担う「機能」という3つの視点から、明治期の綿紡績業の写真を素材として検討を加えることにしたい。近年、資料のデジタル化とインターネット上での公開により、歴史研究で写真を容易に利用できる環境が整いつつあり、経営史研究でも、写真をはじめとする画像資料を読み解くことの重要性が今後高まることも考えられる。経営史研究では、文字資料を用いることが多いが、「史料」として写真を利用することの可能性を考えることにする。

キーワード 画像資料、写真、挿絵、画証、機能

1 「挿絵」から「史料」へ

経営史研究では、企業で作成された内部文書や、社史・社内報・有価証券報告書・営業報告書などを利用する。これらの多くは、文字によって情報が記録されたものであり、過去の事実を知る上で有効なものである。しかし、社会の出来事や人間の活動の中には、文字での記録が困難なことも少なからずある。それを探る手掛かりとして、景観・遺物・絵画・地図など、非文字資料と呼ばれる様々なものがあり、近現代史の領域では、口述資料や映像資料、そして写真がある。

本稿では、多様な非文字資料の中でも近現代史固有の資料であり、経済史や経営史の研究でも有益な資料となり得る写真を取り上げ、その利用可能性を考えることにしたい。「二十世紀史の探求は、映像史料と切り離すことができない¹⁾」といわれるように、映像化の時代が到来すると、近代化・工業化・西洋化・都市化など、様々な社会的な変化が映像で記録されるようになった。その中でも、写真は記録の手段としてだけでなく、例えば企業をみると、

a 甲南大学経営学部, hirano.kyohei@konan-u.ac.jp

写真をコミュニケーションのための基礎的手段と位置づけ、その自己表現の理想的メディアとして、多様な概念やメッセージを各ステークホルダーに伝達するためにも利用されるようになった。²⁾それを踏まえると、文字資料の利用が中心である経営史研究でも、写真を資料として利用できる可能性があるように感じられる。

しかしながら、これまでの写真の使い方の傾向として、写真を含む画像資料を取り上げた研究では、「写真は固有の「史料」というより、史実を説明する文字テキストを補完する「挿絵」として恣意的に切り貼りされたにすぎない³⁾」とされており、それは、経済史や経営史のような分野でも概ね同様であった。十分な検討を経た上で、写真が「歴史記述の客観性を保証したり、その理解を補助する不可欠の材料⁴⁾」になるならば、歴史叙述を彩り視覚的なイメージをもたせようとする使い方にも意義があるといえる。しかし、画像資料を固有の「史料」として評価するならば、歴史研究として、より積極的な利用が求められる。

その1つのアプローチが、「画証」という形での利用であり、写真を過去の視覚的な情報を得る上での最良の資料と位置づけ、事実を確認しようとするものである。⁵⁾もう1つのアプローチが、写真それ自体を考察の起点として、写真を通じて社会史的な諸相を捉え直そうとする、あるいは社会的な機能を分析しようとするものである。⁶⁾このような写真をめぐる異なるアプローチは、研究分野や研究目的に応じて使い分けられるべきと考えるが、写真を含む画像資料の利用に慎重な立場から批判されることがないように、写真のもつ事実の確認や意味の確定を厳密に行うことが求められる。

そこで、本稿では、まず資料としての写真の特性を整理した上で、「挿絵」としての写真、「画証」としての写真、写真の担う「機能」という3つの視点に立ち、明治期の綿紡績業の写真を素材として検討を加えることにしたい。

2 資料としての写真の特性

写真は、撮影した当時の人物・建物・風景・事件・事象などをありのままに写したものであり、「正確な記録性や、時間と空間を越えて視覚的な記録を残すことができる機能を持っている⁷⁾」とされる。被写体のある特定の時点を視覚的に保つということは、過去と現在との対比を意識させることでもあり、「写真は変化を、そして時間を視覚化する⁸⁾」ものともいわれる。写真は、その記録性から歴史研究の重要かつ有益な資料になるが、利用する際には、写真のもつ特性を十分に理解しておく必要がある。⁹⁾

写真の特性として、第1に、写真は、言語以上に人々の感情に強く訴えかける。写真は、文字資料と違って直接視覚に訴えるものであり、情緒的でもあるが、一瞬のうちに見る者に強い衝撃を与えることができる。第2に、写真は、客観的であると同時に主観的でもある。写真は、過去の事実の一部を正確に記録したものであり、その限りでは客観的であるが、そ

これは過去の事実のすべてではなく、撮影者が選択的に残した事実となっている。第3に、写真は、本文やキャプションに左右される。同じ写真でも説明の仕方によっては正反対の理解になる場合もあり、説明が少なからぬ影響力をもつことになる。¹⁰⁾

絵画や写真といった写実系の画像であっても、写実性が追求される一方で、空間の切り取り方や構図に制作者・撮影者の主観が反映されており、必ずしも客観的な記録として事実を写し出しているわけではない。¹¹⁾写真は、撮影者の様々な目的・意図・思想を反映した主体的かつ選択的なものであり、撮影された時代や場所の社会的状況や政治・権力関係などを内包しているものでもある。¹²⁾企業が写真を用いる時でも、リアリズムをもって受け止められる写真という媒体をもって、企業が事実として伝えたいことを選択的に訴えようとしていた側面もある。また、写真をめぐっては、資料に内在する主観性の問題だけではなく、写真が見る者の感覚に訴えかけるとともに、見る者も例えば審美的な視点をもって写真に眼差しを向けることもあり、鑑賞者（見る者）の主観性や感覚性と切り離せるものではない。

かつて歴史学は科学化を志向する中で、主観的で曖昧な要素を排除し、事実として信頼できる客観的なデータを追求する記録の学問へと変質していった。¹³⁾それは、客観性・論理性・実証性への志向ともいえるものであり、主観性・非論理性・感覚性からの脱却が目指されるものであった。そのため、審美的な視点をとともなう芸術作品の解釈論として写真を含む画像資料が取り上げられることを除けば、画像資料をめぐる趣味的鑑賞や印象批判から離れて、主観性や感覚性を排し、画像資料の内容を客観的に読み取ろうとして「画証」的に利用されることになった。¹⁴⁾その点では、画像資料が歴史学で取り上げられなかったわけではないが、近年ではより積極的な価値が与えられるようになっている。

その背景には、歴史学の大きな潮流として、1970年代以降にマルクスやヴェーバーたちに導かれたグランド・セオリーや絶対的な指標が後退していき、歴史学の新たな方法や目的が模索されるようになり、それまでとは異なる視点や問題意識に立って、見落とされてきた資料にも目が向けられるようになったことがある。¹⁵⁾1990年代に入ってから過去のものが主観的な構築物であるという認識は、それまで排除しようとしてきた主観性に向き合うことを促し、歴史研究での資料の取り扱いにも新たな問いを投げかけることになった。¹⁶⁾このような考え方の中では、資料はただの情報源（情報を入れた容器）ではなく、それ自体が現物資料（容器自体も情報）とみられるようになり、資料の社会的機能を解釈の前提として、主観性にもあえて着目し、書き手や制作者の意図を探り出そうとするようになった。¹⁷⁾

そのような中で、写真についても、歴史叙述に組み込む方法が探究されるようになり、写真を通じて社会関係や社会経験などを読み解く、社会史的な叙述が1つの方向性として浮かび上がった。¹⁸⁾それは、写真を文脈から切り離し、純粋に内容や表現だけを取り出した抽象状態で考えるのではなく、社会に現れている状態そのものを問題にすることであり、写真

が埋め込まれている社会的文脈を問い直すことであった。¹⁹⁾ 写真を含む画像資料は、「さまざまな機能を果たしていることに気をつけながら、その形式・構造・機能を理解した上で史料として使うべき」²⁰⁾ものとされる。

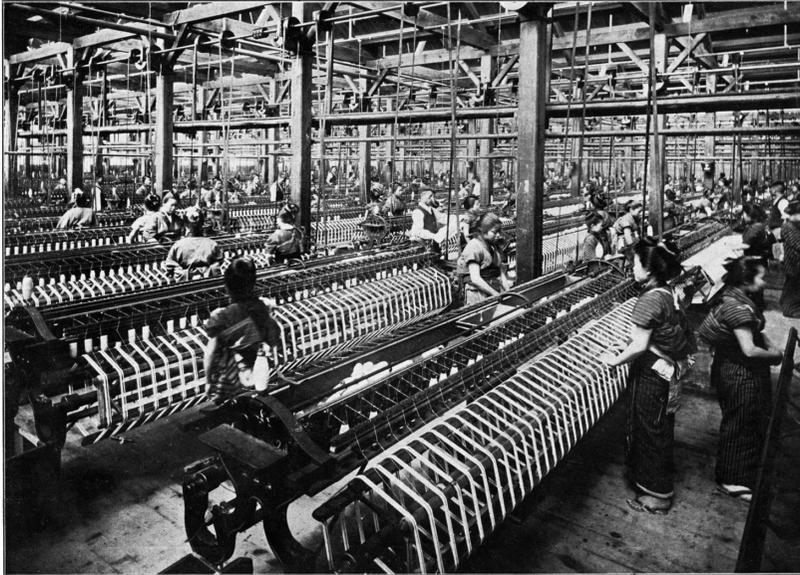
写真を含む画像資料を用いた研究は着実に増えているが、画像資料にはそれぞれ固有の特性があるため、その特性を理解した上で、事実の確認、意味の確定、歴史の叙述を行わなければならない。²¹⁾ 写真を資料として利用する際には、最低限追求すべき事項として、撮影者・制作者とその属性、撮影・制作された時期や場所、修整・合成の有無などがあり、これらが情報の正確性を考える上で重要となる。しかし、写真に含まれている情報だけでは撮影者・時期・場所のすべてを確定することは難しく、写真とその他の資料を突き合わせることも求められる。²²⁾ 十分な検討を踏まえた正確性をもって、画像につきまとういかがわしさの根拠になる作為の問題、画像の本物らしさと事実との距離の問題に向き合っていかなければならない。加えて、写真を含む画像資料を歴史叙述に利用する場合、叙述者による言語化を経なければならぬ²³⁾ということもある。特に絵画や写真のような主観性や感覚性と深く関係する画像資料の叙述・説明では、絵画や写真から確実にわかることと推測されることを厳密に区別²⁴⁾しなければならない。

3 「挿絵」としての写真

歴史の教科書や歴史叙述の書籍などには、写真が掲載されていることが多い。画像資料の「挿絵」的な使い方は、本文を理解しやすくしているならば、それを評価することはできる。しかしながら、「挿絵」としての利用では、見る者の視覚や感情に訴えかけるという写真の特性のため、画像資料の十分な検討がなされないまま、本文のイメージに合致するものや見栄えのよいものを探そうとする傾向があり、しかも不正確ないし曖昧なキャプションが付与されていることもある。²⁵⁾ 文字資料に多くを依拠する歴史研究の中で、それ以外の資料を別なものとして扱ってきたことが影響したといわれるところである。²⁶⁾

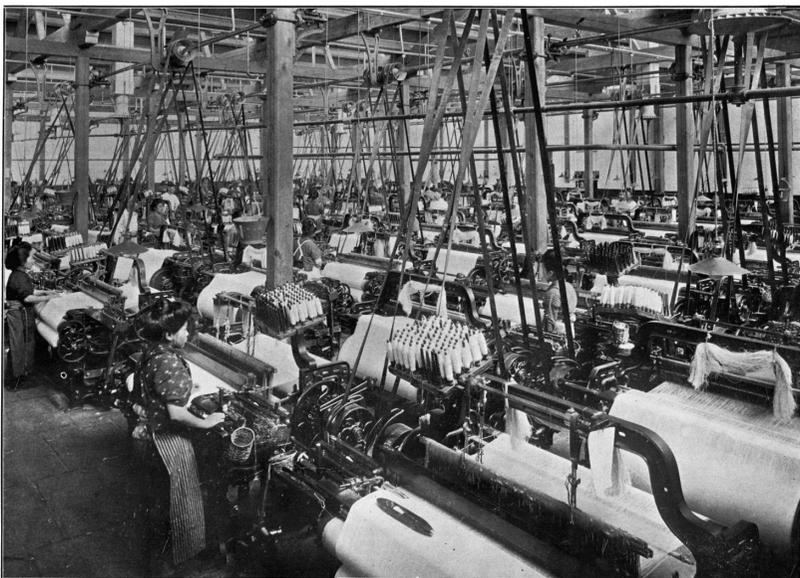
一例を示すと、明治期の工業化をめぐる叙述の中で、その担い手である綿紡績業をイメージさせる「挿絵」として、日本史の教科書や資料集で利用されてきた写真²⁷⁾1がある。この写真は、かつては機械制綿紡績業で初めて経営的な成功を取めた大阪紡績のものとされていたが、実際には鐘淵紡績の兵庫工場のものであり、多くの人手を必要とした総繰工程を写したものであった。²⁸⁾ 混同されるようになった経緯は不明であるが、この写真を利用する側としては、戦前の繊維産業では多くの若い女性労働者たちが働いていたという認識が広く定着していることから、女性たちが工業化のイメージと不可分な機械に向かって作業している工場労働の風景が望ましいと考えたことや、女性労働者を多投する昼夜二交代制を採用して成功したとされる大阪紡績の叙述ともイメージが一致すると考えたことがあったように思われる。

写真1：鐘淵紡績兵庫工場総繰工程



(出所)：『鐘淵紡績株式会社写真』鐘淵紡績株式会社，1905年。

写真2：鐘淵紡績兵庫工場織布試験工場



(出所)：『鐘淵紡績株式会社案内』鐘淵紡績株式会社，1906年。

しかも、写真1は、整然と並ぶ機械とそこで秩序立って働く女性労働者たちの姿が当時の工場労働の雰囲気をよく物語っているように見えるが、例えば同様に機械の前で働く女性労働者が写っているほぼ同じ時期の別工程の写真2と比べて、奥行きをもったアングルで写されていることに加えて、天井部のシャフトと機械をつなぐベルトが見る者の視線を遮ることも少なく、観覧地点や視線誘導といった空間構成の面でも好まれるものであったといえる。

この写真1をめぐるのは、歴史叙述のための「挿絵」としてイメージを示すだけならば、大阪紡績でも鐘淵紡績でも関係ないように思われるかもしれない。しかし、一般的に繊維産業の労働に対してはネガティブなイメージをもたれる傾向にあり、労働者の待遇改善に先駆的に力を入れていた鐘淵紡績であるのか、そういった改善がまだ十分ではない他の紡績企業であるのか、被写体となった企業の違いによって、写真を見る者の労働者に向ける眼差しや工場労働の雰囲気の印象が異なってくることも考えられる。写真のもつ特性でも触れた説明やキャプションの影響を考慮すれば、やはり写真の工場がどの企業のものであるのかを十分に検証し、その上で説明やキャプションを正しく記すことが求められる。

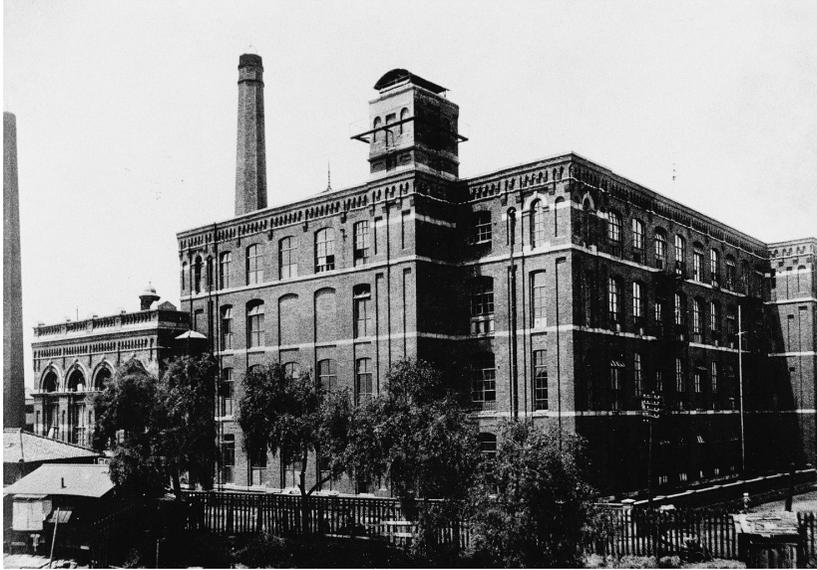
4 「画証」としての写真

「画証」的な視点は、絵画や写真を過去の事実を示す根拠としてみるものであり、画像資料を考証的・実証的に利用しようとする素朴な動機に基づくものである。また、絵画や写真には、文字による記述では捉えがたい過去の人間の生活・民俗・文化などの諸側面が含まれており、諸活動の重要な復元資料として視覚的情報を読み取ろうとすることもあった²⁹⁾。このような立場としては、写真からどのような情報を読み取れるのか、写真の細部までを読み取って他では得られない情報を導き出せるのかが重要になってくる³⁰⁾。近現代史であっても、具体的なイメージに乏しいこともあり、そのような場合には、写真が有益な手掛かりの1つになり、推測でしかなかったことを確認できる可能性がある。

一例として、明治期に視覚的情報を伝えるメディアとして広く流通していた錦絵のような版画と新しいメディアとして普及しつつあった写真が併存した時期の大阪紡績の姿を考えてみることにする³¹⁾。錦絵は、「眼前の現実を正確に描くが、未来については想像が強く、絵の信頼性を損なう³²⁾」ことや、「全体像がわからないまま描かれることが多く、センセーショナルな荒唐無稽な部分を含むため、信用しがたい³³⁾」ことなどが指摘される。版画に描かれている対象が、些細なことかもしれないが、実在したのかわからないものもあれば、実際にはあったにもかかわらず描かれていないものもあるため、版画の「画証」的な利用には注意しなければならない。

明治期の大阪紡績のイメージを形作るものとして、1889年12月に竣工した三軒家第三号工場の写真3がよく利用される。この第三号工場は、イギリスの建築と見紛うような煉瓦造4

写真3：大阪紡績三軒家第三号工場



(出所)：東洋紡株式会社社史室所蔵。

写真4：大阪紡績三軒家第一号工場



(出所)：『大阪紡績三軒家工場アルバム』東洋紡株式会社社史室所蔵。

図1：創業初期の大阪紡績を描いた版画



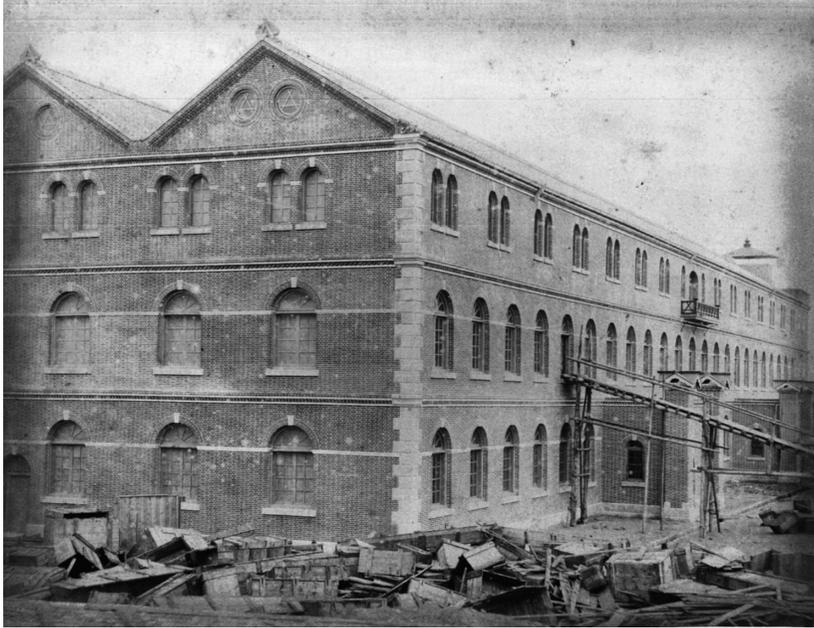
(出所)：「大阪紡績会社第壹第貳工場」上野栄太郎，1885年。

階建てとなっており、近代化・工業化をイメージさせる上での格好の素材としても用いられ、日本の産業革命期を代表する綿紡績業の歴史叙述を彩るイメージの役割を果たしてきた。しかしながら、1882年の会社設立当初は多層階ではなく、第一号工場は、写真4のような平屋建ての煉瓦造であり、日本で最初期の鋸屋根をもった工場の1つとされ、その後の紡績工場の原型といわれるものであった。多層階になるのは、1886年5月に竣工する3階建ての第二号工場からであった。

その創業初期の大阪紡績の実像に迫るには、これまで絵図に依拠することが多く、その中でも図1の版画がよく利用されてきた。しかし、この版画は、第二号工場の建設中である1885年4月に著作権免許となっているにもかかわらず、その工場が完成した姿として描かれている。そこに版画の正確性の問題が浮かび上がってくるが、近年、その存在が確認された『大阪紡績三軒家工場アルバム』（東洋紡株式会社社史室所蔵）に収められた写真27点のうち³⁴⁾20点を利用することによって、実際に竣工した工場との違いを検証することが可能になった。

このアルバムの写真と比較すると、図1に描かれた建物外観や位置関係については、概ね正確性が認められる。第二号工場建設以前の第一号工場を撮った写真4にみえる10連の鋸屋根が、図1では9連として描かれており、第一号工場に増築する形で進んでいた第二号工場の建設による変更を正確に反映していたことがわかる。しかし、建設中に描かれたため、第二号工場屋根中央の塔や2本の煙突の間の高いポール、北側の塔や塵突の屋根の形状など、実際のものとは異なる構造物やディテールも確認される。図1は、将来の計画や想像を含め

写真5：大阪紡績三軒家第二号工場



(出所)：『大阪紡績三軒家工場アルバム』東洋紡株式会社社史室所蔵。

て描かれたものとみられるが、細部の描写を除けば、第二号工場建設後の様態を示す資料として評価することができる。

一方、アルバムの写真からは、版画に描かれていない情報を読み取ることができる。例えば、写真4をみると、第一号工場は、後の第二号・第三号工場に比べると、意匠面の工夫が少ない簡素な外観であったことや、その屋根には日本で一般的な棧瓦葺が用いられていたことなどが確認できる。また、写真5からは、図1でははっきりしなかった第二号工場の屋根が瓦葺きであったことがわかるだけでなく、第二号工場の建設時には商標への意識が高まっていたためか、鬼瓦・丸窓・バルコニー手摺などの意匠に商標を取り入れる工夫がみられたこともわかる。写真の第一号・第二号工場の姿は、写真3の第三号工場から受けるイギリスの紡績工場建築をそのまま実現したという印象とは異なるものであった。

この当時の撮影手段では、周囲に高い場所もなく、写真が版画で描かれるような大阪紡績の全貌を鳥瞰的に捉えることは難しかったが、絵図であれば、1枚で全体のイメージを伝えることが可能であった。その代わり、写真は、構造物の細部までを正確に捉えており、文字資料や絵図では知り得なかった事実を確認することを可能にした。また、写真は時間を視覚化するといわれるように、アルバムの写真を時系列に整理することによって、大阪紡績の工場敷地の利用の実情や変遷の一部を確認することもできた。このように絵図や写真のもつ資

料の特性を考慮した上で、画像資料を文字資料の空隙を埋めるものとして利用することも可能である。

5 写真の担う「機能」

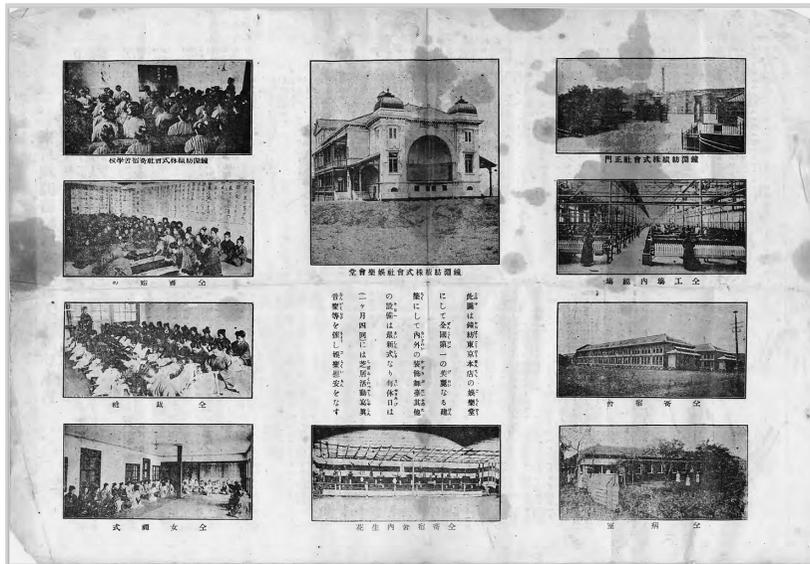
あらゆる図像やイメージは、何らかの意味を表現して伝えることによって存在意義を得ており、その果たしている「機能」に注意を払いながら、資料として利用すべきであるとされる³⁵⁾。写真は、被写体の情報だけにとどまらず、社会の様々な文脈を読み解く重要な手掛かりを与えてくれるものでもある。写真を「史料」として価値づけ直して、写真が埋め込まれている社会的文脈を問い直し、写真のもつそれぞれの場での社会的な「機能」に目を向けることも求められる。経営史研究としても、「画像史料の出典、内容相、外観相の分析に基づき、画像が社会のなかで担った機能に関する分析を行なう」³⁷⁾余地が残されているように思われるため、最後に、この点について、簡単な一例をもって考えてみたい。

明治後期の綿紡績業では、工場の新設・拡張が相次ぎ、労働者不足が顕在化し、労働者の募集競争や争奪に悩まされていた。一部の紡績企業では、福利厚生の実施を中心とする職工優遇策によって対応しようとする動きがみられた。その代表的な存在が鐘淵紡績であり、武藤山治が指揮する兵庫工場では、1902年頃から1907年頃にかけて職工優遇策を進めていた。兵庫工場では、遠隔地の農村から多くの女性労働者を雇用しており、寄宿舎・食堂・娯楽堂などの施設の充実や共済組合の設立などで生活の改善を図り、普通教育や礼儀・作法の他、茶道・華道・料理・裁縫などの教育も提供するようになり、それが次第に同社の他工場にも広がっていた³⁸⁾。このような職工優遇策が労働者の募集に有利に働くとするならば、その実情を労働力の供給地となる農村にいる人々に正しく伝える必要があるが、この点は、これまでの研究ではあまり取り上げられることはなかった。

農村に暮らす人々は、紡績企業から相対的に独立した在地の募集人による情報の他、紡績工場での労働経験のある帰郷者からの伝聞、紡績工場の就業実態を記した新聞記事などによって、紡績工場の様々な情報を入手することができた。しかし、その情報が必ずしも綿紡績業の実態、特に実際の労働事情を正しく伝えているとは限らなかった。募集人は、自らの手数料収入を増やすため、労働者の数の確保を優先し、美化ないし誇張した情報を伝え、一部の帰郷者や新聞は、労働の厳しさや風紀の乱れといったネガティブな情報をもたらすこともあった³⁹⁾。そのような中では、紡績企業自らによる情報の発信のもつ意味は大きかったと考えられる。

鐘淵紡績としては、安定的な労働力の確保のためには、農村社会に自社の労務施策を理解してもらい、自社の評価を高めることが重要であると考えていた⁴⁰⁾。そこで、鐘淵紡績では、職工優遇策の記事や広告を新聞に載せる、日本で最初となる社内報『鐘紡の汽笛』や女性労

写真6：『東京鐘淵紡績株式会社工女募集案内』裏面



(出所)：『東京鐘淵紡績株式会社工女募集案内』鐘淵紡績株式会社東京本店工場，1908年。

働者向けの『女子の友』を発行して郷里の家族や役場に配布する、絵葉書を作成・配布して労働者に郷里との通信を奨励するなど、様々なメディアを用いた情報発信の取り組みをみせていた。⁴¹⁾ そのような中での1つの試みが、従来まで文字情報のみで構成されていた募集案内に写真を載せて視覚的にも情報を伝えることであった。当時の他社の募集案内をみると、例えば、日清紡績の『工女募集案内』は、会社概要・仕事内容・労働条件など、すべての漢字にルビが振られた文字のみで書かれた標準的な内容であり、視覚的情報としては巻頭綴じ込みに工場全景の銅版画が1点あるだけであった。⁴²⁾ 実物の冊子をみると、裏表紙に募集人とみられる人物の住所と名前の印があり、印刷・製本コストも低いとみられることから、募集人が携行して読み聞かせたり、配布されていた可能性がある。

これに対して、鐘淵紡績では、1908年に東京工場で『東京鐘淵紡績株式会社工女募集案内』、1909年に兵庫工場で『織布工手志願者之栞』という募集案内を発行している。前者は、表面に文字による標準的な内容の説明、裏面に写真を中心とした工場紹介がある一枚物の募集案内となっている。表面には、複数の箇所「写真ハ裏ニアリマスカラ御覧ナサイ」などの写真を参照するような指示が書かれている。裏面では、写真6に示すように、10枚の写真を並べているため、1枚当たりの大きさはそれほど大きくないが、工場入口と労働風景が1点ずつある他は、すべて福利厚生関係となっている。一方、後者は、内容的にはほぼ同じとなっている32頁の冊子であるが、そのうち27頁が文字と写真で構成されており、写真7のよ

写真7：『織布工手志願者之棗』

●寄宿舎の事

一、遠方より來れる女工の爲めに寄宿舎の設備あり二千五百人を容れる丈の準備をなせり。

一、夜間は各室毎に電燈を點じ夜具、蒲團は常に清潔なるものを無料にて貸與し又た冬向きなれば、大に火鉢を供へて寒く*

一、寄宿舎には洗濯場の設備ありて女工の工場衣は凡

一、寄宿舎に二

なき様暖か

にしてあ

ります

二、三、から不

自由にな

る事

は少し

もあり

ませぬ。

一、寄宿舎に

は係員の外

に女の世話

掛十人あり

て皆様の爲

めに萬事相談相

手となり御世話を

致します。

致します。

（第一寄宿舎内）

（第二寄宿舎内）



（出所）『織布工手志願者之棗』鐘淵紡績株式会社兵庫工場，1909年。

うに頁中央に写真を大きく配置するなど、文字情報と視覚的情報を関連づけたレイアウトを試みる工夫が凝らされている。掲載されている写真も、それ以前に発行されていた写真帳のものからほぼ一新されており、43点のうち32点が福利厚生関係のものとなっている⁴³⁾。両者とも、これから働こうとする女性たちに工場での日常の暮らしを視覚的情報とともに伝えようとする意図が読み取れるものであり、ある程度の部数が印刷され、募集人に携行させることもあれば、配布することもあったとみられる。

募集案内での写真の利用がみられるようになったのは、募集地盤の形成が進んでいた時期であり、職工優遇策が出揃い充実した時期とも重なるものであった。鐘淵紡績の試みは、当時、リアリズムをもって受け止められていた写真を通じて、真実味をもった姿として同社の実情を伝えようとするものであり、それによって農村社会の理解を促し、自社への応募の動機を育もうとしていたとみられる。募集案内に掲載された写真には、同年代の女性たちの日常の暮らしの姿が捉えられており、その姿を自身に置き換えて新しい暮らしをイメージさせることによって、これから働きに出ようとする若い女性たちが知らない土地に行くことや、どのような場所で働くのか、どのような暮らしになるのかといった心理的な不安を和らげる「機能」を果たしていたと考えられる。

しかしながら、このような募集案内には、職工優遇策を他社に先駆けて、しかも大々的に進めていた鐘淵紡績の思惑や意図が反映されていた可能性があることも理解しておかなけれ

ばならない。この時期の鐘淵紡績の写真には、過度によいところを誇張するような印象はなく、ありのままの姿を伝えようとする姿勢が感じられ、写された工場の生産現場や労働者の生活の場が実際の姿であったといえるかもしれない。しかし、それは、潜在的な労働者に対して見せたかった姿でもあり、鐘淵紡績としての意図が込められた姿であった可能性も否定できない。また、実際の募集現場では、視覚的情報をともないつつ正しく情報を伝えるという鐘淵紡績の意図とは異なり、募集人が、後に『女工哀史』で問題視されたような、写真を用いて誇張したり誤魔化したりするような使い方がみられたかもしれない⁴⁴⁾。

農村から紡績工場に働きに行く者が増えるにつれて、また鐘淵紡績の職工優遇策と同様の施策が他社でもみられるようになると、募集案内の写真の構成や内容にも変化が生じるようになり、紡績工場の現実を写真によって伝えることよりも、福利厚生設備や内容の充実ぶりを訴える手段へと傾斜していったようにもみえる。時の経過とともに写真を利用する目的は変わると考えられるが、まだ農村に十分な情報が行き渡っていない当初の状況では、潜在的な労働者に視覚的情報を含めた情報を伝達する貴重な手段であり、その心理に働きかける「機能」を担っていたといえることができる。

6 結語に代えて：写真の利用可能性

近代に登場した写真は、「写真の中の近代」と「近代という時代における写真」という2つの側面から「史料」として位置づけることができる⁴⁵⁾。近現代を対象とすることが多い経営史研究では、今後、写真を「史料」として利用することが増えるかもしれない。画像や映像にまつわる技術とメディアの発達とともに、視覚的表現の大量生産と大量消費が実現・進展するようになり、写真には、宣伝広告に代表される商業性という性格が付与されるようになった⁴⁶⁾。本稿では取り上げることができなかったが、例えばサントリーや森永製菓などのように、戦前の新しい商品の導入期・普及期に果たした宣伝広告の役割を考える際には、単に文字情報から追うだけではなく、宣伝広告に取り入れられた写真やイラストの視覚的情報やイメージを分析することも必要になってくる。

近年、古写真といわれる近代の写真に掲載した写真集の発行が相次ぎ、大学や図書館などでの近現代の写真のデジタル化とインターネット上での公開も行われるようになり、歴史研究で容易に写真を利用できる環境が整いつつある。経営史研究でも、写真をはじめとする画像資料を読み解くことの重要性が高まるかもしれないが、画像資料は眺めているだけでは何も語らない。画像資料に対する見る側の読解力にかかってくるため、画像リテラシーといわれるものが重要になってくる⁴⁷⁾。画像資料から事実や意味を引き出すには、歴史家が自身の中に抱く関心や問題意識を大切にしながら、資料に向き合い、問いを投げかけ、答えを導き出そうとする姿勢が求められるように思われる。

注

本稿の執筆に際しては、東洋紡株式会社および同社サステナビリティ推進部の三谷直子氏に写真の利用で、清水建設株式会社技術研究所の平井直樹氏に共著論文の成果の利用でご協力いただきました。この場を借りて心より感謝申し上げます。

- 1) 有馬学「イメージの史料性」『史学雑誌』第119編第3号, 2010年3月, 33頁。
- 2) デビッド・E・ナイ(山地秀俊・山地有喜子訳)『写真イメージの世界 ゼネラル・エレクトリック社のコーポレート・アイデンティティ 1890年から1930年まで』九州大学出版会, 1997年, 16頁。
- 3) 緒川直人「写真経験の社会史」考一史学と写真史料研究一」緒方直人・後藤真編『写真経験の社会史 写真史料研究の出発』岩田書院, 2012年, 13頁。この他にも、例えば、山口徹「絵画・「モノ」史料論—史料学を考える一つの試み—」『歴史と民俗』第14巻, 1997年9月, 42頁; 黒田日出男「図像の歴史学」『歴史評論』第606号, 2000年10月, 4-5頁, 11頁; 武井弘一「特集〈図像資料論〉に寄せて」『地理歴史人類学論集』第3号, 2012年3月, 2-3頁など、多くの研究で指摘される。
- 4) 井上久士「歴史学における写真史料—南京事件の場合—」『歴史評論』第606号, 2000年10月, 64頁。
- 5) 黒田, 前掲論文, 9頁; 藤原重雄「画像資料と歴史研究・叙述・教育」大津透ほか編『日本歴史 第21巻 史料論』岩波書店, 2015年, 134頁。
- 6) 黒田, 前掲論文, 13頁; 緒川, 前掲論文, 14頁; 千葉敏之「画像史料とは何か」吉田ゆり子・八尾師誠・千葉敏之編『画像史料論 世界史の読み方』東京外国語大学出版会, 2014年, 18頁。
- 7) 後田多敦「歴史資料としての図版と写真, イラスト—首里城大龍柱の向き「改ざん」問題を事例に—」『歴史と民俗』第40号, 2023年7月, 297頁。
- 8) 阿南透「写真のフォークロア—近代の民俗—」『日本民俗学』第175号, 1988年6月, 72頁。
- 9) 資料としての写真の特性を考える場合には、その当時の写真の撮影や印刷の技術を踏まえる必要があるが、この点は、多木浩二「十九世紀写真史ノート(1)」『写真装置』第6号, 1982年11月; 同「十九世紀写真史ノート(2)」『写真装置』第8号, 1983年10月などに譲ることとする。
- 10) 井上, 前掲論文, 74頁。
- 11) 千葉, 前掲論文, 20頁。
- 12) 麻生将「写真資料を用いた宗教研究に関する試論—1910~30年代のキリスト教会を事例に—」『佛教大学歴史学部論集』第12号, 2022年3月, 19頁。
- 13) 千葉, 前掲論文, 20頁。
- 14) 黒田, 前掲論文, 9頁, 12-13頁; 藤原, 前掲論文, 135頁。例えば、芸能史研究では、役者絵から読み取れる情報を収集し、正確な年代考証と内容分析を行い、また文字として捉えがたい視覚的な側面から舞台の復元に利用することもある(赤間亮「歌舞伎における「役者絵」の可能性—まとめに代えて—」『芸能史研究』第176号, 2007年1月, 81頁, 84-85頁)。
- 15) 黒田, 前掲論文, 5頁; 千葉, 前掲論文, 22-23頁。
- 16) 千葉, 前掲論文, 23頁。
- 17) 千葉, 前掲論文, 23頁; 池上俊一『歴史学の作法』東京大学出版会, 2022年, 85頁。

- 18) 緒川, 前掲論文, 22頁。
- 19) 多木, 前掲論文(1983年10月), 156頁。
- 20) 池上, 前掲書, 82-83頁。
- 21) 多様なものが含まれる画像資料の中で, 写実系画像だけを見ても, 写真・図版・絵画・イラストがあり, それぞれの特性と正確性に違いがある。写真は, 絵画やイラストに比べると正確性が高いといえるが, イラストは, 写真にない特性として, 対象の本質から迫ることで実像のイメージを描き伝えることができる(後田多, 前掲論文, 298頁)。
- 22) 井上, 前掲論文, 75頁。
- 23) 有馬, 前掲論文, 35頁。
- 24) 井上, 前掲論文, 75-76頁。
- 25) 武井, 前掲論文, 2-3頁。
- 26) 藤原, 前掲論文, 131頁。
- 27) 以下は, 平野恭平『鐘淵紡績株式会社写真』と大阪紡績の工場写真』『日本歴史』第820号, 2016年9月に基づいている。
- 28) 大阪紡績が1908年に発行した『創業貳拾五年沿革畧史』には, 総繰工程を含む各工程の写真が掲載されているが, それでも写真1が用いられていた理由としては, 見る者に与えるイメージによるところが大きかったと考えられる。
- 29) 藤原, 前掲論文, 147頁。
- 30) 西城浩志「大判印画の詳細読解による鉄道開業時の史実解明」『日本写真学会誌』第83巻第3号, 2020年, 236頁, 242頁。
- 31) 以下は, 平野恭平・平井直樹「創業初期における大阪紡績会社三軒家工場のイメージと実態の乖離—東洋紡所蔵『大阪紡績三軒家工場アルバム』からのアプローチ—」『技術と文明』近刊に基づいている。
- 32) 西城, 前掲論文, 234頁。
- 33) 西城, 前掲論文, 235頁。
- 34) この時期の大阪紡績の実態については, 渋沢史料館に収蔵されている建築図面からアプローチしたものと, 平井直樹・結城武延・玉川寛治・阿部武司「初期日本紡績工場の設計図面—二千鍾紡績関係資料および大阪紡績会社関係資料—」『渋沢研究』第31号, 2019年1月がある。
- 35) 池上, 前掲書, 82-83頁。
- 36) 緒川, 前掲論文, 14頁。
- 37) 千葉, 前掲論文, 18頁。
- 38) 鐘淵紡績での武藤山治による工場管理と労務管理については, 桑原哲也「日本に於ける近代的工場管理の形成, 上」『経済経営論叢』第27巻第4号, 1993年3月; 同「日本に於ける近代的工場管理の形成, 下」『経済経営論叢』第28巻第1号, 1993年6月などを参照していただきたい。
- 39) 中村政則『日本の歴史29 労働者と農民』小学館, 1976年, 161頁; ジャネット・ハンター(阿部武司・谷本雅之監訳)『日本の工業化と女性労働 戦前期の繊維産業』有斐閣, 2008年, 78頁。
- 40) 桑原, 前掲論文(1993年6月), 26-27頁。
- 41) 新聞記事は1903年7月13日の『時事新報』, 新聞広告は1905年7月24日の『大阪朝日新聞』か

らみられる。『鐘紡の凧笛』は1903年6月に『兵庫の凧笛』として始まり、翌月に改称され、『女子の友』は1904年1月から毎月1回の頻度で発行されていた。また、労働者とその郷里を結ぶコミュニケーションの手段として利用された絵葉書については、工場内の労働や生活の場を撮った写真が掲載されており、その「機能」からみても、本稿の対象になるが、別稿を用意しているために割愛した。

- 42) 日清紡績の『工女募集案内』には作成年月の記載がないが、内容からみて1909年頃に作成されたものと推定される。他の紡績企業の募集案内については、さらなる調査が必要であるが、日清紡績と同様のものが利用されていたとみられる。
- 43) 鐘淵紡績が1905年に発行した『鐘淵紡績株式会社写真』をみると、写真46点のうち工場・建物・生産現場が25点、福利厚生関係が18点となっている。この写真帳の用途は不明であるが、各写真のキャプションから、綿紡績業のことをあまり知らない一般人、もしくはこれから働こうとする者に向けて作られたものと推測される。
- 44) 細井和喜藏『女工哀史』改造社、1925年、56-57頁。同書には、以下のような記述があり、写真に対して批判的な目を向けている。

大會社になると活動写真や芝居を應用して女工募集の宣傳に供する。都會でこそ活動なぞ糞珍くもないが未開の山間ではまだ仲々珍重がられるから巧妙な宣傳方法たるを失はない。會社は各々募集地へ赴いて寺院などを貸り、無料公開をやるのだから村人達は皆さそひ合せて見物に来る。そこで普通写真に差加へて「工場の實況」を映寫するのである。写真は正直だ。自然の象その儘を如實に寫し出すといふが大嘘の皮で、写真は凡てを美化してすふ。加ふるに悪い場面は収めてないから極めて美しい。白い帽子、黒い上衣、白いエプロン、裾短かき袴、靴下に靴といふ輕快な姿はまことに明るく幸福さうに觀えるのだ。で、工場の實際を知らぬ人が誤魔化されてすふのも無理はなからう。凡てが大いに洋化された現代の工場は、如何にも愉快さうに學校の如く思へるだらう。

- 45) 小川直之「画像資料研究の課題—「劣化画像資料の再生活用と資料化に関する研究」の成果を踏まえて—」『國學院大學日本文化研究所紀要』第100輯、2008年3月、161頁。
- 46) 有馬、前掲論文、33-34頁。
- 47) 山口、前掲論文、43頁；黒田、前掲論文、12頁；藤原、前掲論文、131頁。